
の神による世界ノタメノ秩序変換 絶望には大いなる希望を、希望には深淵なる絶望を与えよ

青波 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の神による世界ノタメノ秩序変換 絶望には大いなる希望を、希望には深淵なる絶望を与えよう

【Nコード】

N8002X

【作者名】

青波 楓

【あらすじ】

あらすじを簡単にいえば普通の日常を送っているように送っていない、クールなようで喋り出すと止まらない、何にも考えて無いように色々と考えている主人公田口君が戦って戦って戦いまくる物語です

序章 終わりの始まり（前書き）

とりあえず書きたいことを書いてみました。萌えがあまり好きじゃないので、ちよつと萌えに飽きちゃった人、また少し距離を置きたいなーという人がいたら是非呼んでほしいですね

序章 終わりの始まり

（声・・・声が聞こえる・・・。ゆっくりとした口調にも関わらず、威厳に満ち溢れた声が聞こえる・・・）

諸君らにこんな事を問おう

何のために生まれてきたのか考えた事はないか

何のために生きているのか考えた事はないか

何のための生殖か 何のための食事か 何のための睡眠か

何のための努力か何のための征服か何のための死なのか！、などと
考えた事はないか

自分で考えるのはもちろん、他人に聞いたり本を読んだり、あげく
宗教にまで入り考えた人はいないだろうか

下らない。実に下らない。

迷える全ての人間に公言してやろう

『生きてる事に意味などない』

分かりやすい例として他の生き物で考えよう

一体どの生き物が自分自身が生きている事に疑問など持とう。そし

て一体どの瞬間に生きている事に疑問など持とう

人間などたかだか64億人、だが他の生物は人間の何『j q お h じ
よ い え j ほ じ え p r 』倍いるというのだ

人間が生きてきた時間にくらべて何『j 』ふい円のwんwおのをうい
d き n 』倍生きてきたと思っているのだ

小さい。あまりにも人間など小さい。この世の膨大かつ無限大に広
がる全てのものの前ではあまりに小さすぎる

そんな人間が、神が作りし生を批判するなど笑いも止まらぬ、考え
る事すら論外だと思わないか

神に振りむいて欲しいと思った事はないか？だが多少祈った所で全
ての時間の全ての生き物に全ての事象を見守っている神が壺人間ご
とくに振り向くと思うか？

そんな事はいえぬ。通常はいえぬ事なのだが、私は諸君ら
人間にも生態系一番のプライドがある事、そして中々に興深い考え、
生き方があるのも認めよう

ゆえに一つだけ用意した。神が作りし秩序を一つだけ破壊、再構築
する権利を与えようではないか

奪い合うがいい。神の作りし世界を冒瀆し翻したいと思う物達よ存
分に奪い合うがいい

職歴経歴学歴戦歴家の血筋等々いっさい問わぬ。力も我が与えよう

さあ開幕といこうではないか。神の秩序の終わりの始まりを！！

20XX年5月23日午前5時30分 自宅

「なんか最近変な夢みるんやけど・・・」

えー、簡単に自己紹介すると俺こと田口千尋、現在高校二年である。趣味はポン酢と格闘技である。ポン酢良いよね本当に。色々な柑橘類が織り成すハーモニーはすばらしい。これだけでご飯何倍もいけるもんだ。醤油とかソースよりポン酢の量が減る家も珍しいのではないだろうか（しかも俺一人で）。格闘技はまあキックボクシングである終わり（こっちは適当）。

「ん？変な夢って何か？2000年問題で兄貴の『おしべとめしべ』とかいうエロフォルダでも壊れる夢でもみたか？」

我が妹こと田口^{ベル}辺流である。陸上部である。エースではないがチームを引っ張てる精神的柱らしい。

「そんな大変な夢！・・・いやいやそれは決して大変ではないですよベルさんや。それとおしべとめしべの勉強をしているだけですよ・・・断じてやましいことには使っていないでああ、ありんすですよ、ハイ。」

「・・・なんでそんなバレバレの嘘つくか。あのさあ、あのフォルダ名、エロ画像隠す隠さない以前の問題でもはやセクハラの問題ですらあるよ。つか隠語のつもりか知らないけど全然隠れてねーからいやむしろ卑猥さが強調されてるわっ！」

ビシッという効果音が出そうな勢いで突っ込む妹。こいつお笑いのセンスありそうだな

「あーあーあー、ごっほん。ところで夢の内容なんだが」

（ジー・・・）

露骨な話題転換に何か言いたげな妹だが、気にせず話を続けよう「いや神がどーとか世界がどーとか秩序がどーのこーの説明される夢だった。なんか人間はちっぽけな存在だからーうんぬんかんぬ

んみたいな話もされたな」

「ん？もつかい言ってくれる？」

「いやだから神がどうたら世界がどうたら長々と説明される感じだった」

「んー、そつかぁ。。。」

てつきり馬鹿にされると思ってたが何か考えてるようだな。普

段はグータラな妹だがまるで陸上の時に見せる真剣な表情をしている

「兄貴今年で高2だよねえ。本来ならそんな神がどーとか世界？秩序？とか変な妄想に浸るのは3年前に卒業しとけといたいけど・・・」

「

ワンテンポ間を置いて話す妹

「兄貴の場合は格闘技をやってて、キツクなんてただえさえ激しい競技なのに、常人にはかけ離れてるぐらい激しい試合をするよね。」

私格闘技好きだから有名どころはほとんど見てるけど、何と言えればいいんだろ、あれは殺意？うーん何なのか良くわかんないけど、あれだけ凄い勢いで敵に襲い掛かる選手も過去見たことないよ。兄貴の試合は相手にとれば素直に殺されたほうが楽なんじゃないか・・・なんて思うの・・・」

何故だろういつも気丈な妹が小さく見える。肩も震えてるな。まあ、それも仕方ない。俺の試合を最初から最後まで直視できる客なんぞほとんどいない。なかにはボー然と立ち尽くしそのまま魂の抜けた人形みたいに終始じつとしている人もいる。なかには興奮、発狂して殴り合いを始めるやつもいる。これは直接見たわけではないが、今まで引きこもりだった学生が俺の試合を見て急にやる気を出し学校で中心的な存在になり生徒会長にまでなった奴がいたとか、逆に恋愛や仕事がとても充実した毎日を送っていたOLが俺の試合を見た後にシヨックで引きこもり、あげく出家したという人がいたとか。

『絶望あるものには希望を、希望あるものには絶望を』 誰がつけたかは分からないが俺の試合のキャッチフレーズみたいになつて

いる。

それから少しの間が空き、落ち着いていつもの妹がゆつくりと発言した

「まあとりあえず私の意見なんだけどー、寝るのに支障をきたしてるぐらいなら一度精神科に行ったほうがいいんじゃない。うちの学校でもいたんだけど、スポーツ選手は緊張のあまり寝れないとか、じつくり休めないって人は精神科に行つて軽い薬、いわゆる安定剤みたいなのをもらうらしいよ。今は副作用もほとんどないらしいし」

「精神科なあ。まあ睡眠自体は良く取れてるから問題ないし、困ってる分けでもないしな。まあ一応選択肢の一つとして考えとくわ。サンキューな我が妹よ」

「いやー、それほどでも・・・ありますね！とか言いながら照れてたり、苦しゅうない苦しゅうない、とかやつてる妹を華麗にスルーして立ち上がる

「それじゃあ走りに行くか」「応さー！」5時45分、毎日行われている朝の日課が始まった

午前7時46分 学校

「おはよー田口君」

「おはよー」

「オイーッス田口」

「おいーっす」

「よう田口」

「よいーっす」

「田口いー、宿題見せてくれー」

「いやーっす」

「・・・あの田口君・・・お・・・おはようなんだな」

「お・・・おはようなんだな、お・・・おにぎりなんだな」

朝トレ終わって飯食ってシャワー浴びて学校に来ればだいたいこ

の時間帯である。学校の説明をさせてもらうと、ここの周りは田んぼや自然に囲まれていてとても空気がいい。かといって田舎というわけではなく徒歩12、3分ぐらいで都会にいけるのでとてもアクセスが良い。よって毎年沢山の入学希望者がいて、またこの学校も幅広く生徒を取るので色々な個性を持った生徒が集まったりする。まあ簡単に言うと言い人から馬鹿な奴までここに来るのである。俺はというと勉に才能があるわけではないし腰をすえて勉強する時間もあまりないので朝のこの時間は宿題含めた勉強をしていることが多い。毎日の2、30分は馬鹿にならないのである

序章 終わりの始まり（後書き）

とりあえず序章ですがご愛読 愛されたかどうかは分らんが
りがとうございました。どんなコメントでも嬉しいハッピーな気持
ちになるんですが、強いて、強いて強いて言いますと駄目なポイン
トを一つでもいいので入れてくれれば幸いです。ごさいます。です
ますですますっ！ 語尾強調に特に意味はない

というわけで序章だけな上に中途半端なところで区切ってしまいま
したが、また次もがんばりたいと思ってるのでよろしくお願いしま
す

第2章 田口君の日常その1（前書き）

いよいよ寒くなってきましたね。我が家はヒーターを一軍に昇格させましてホカホカの中で書かせてもらってます（ちよつと眠い）。今回は日常でコメデイ強めに書いてみました。日常会話の面白さは才能が必要だと思ってるので受け入れられるか不安で不安でいっぱいであります。ああ、それにしても眠い・・

第2章 田口君の日常その1

午前8時03分 学校

田口「こっちはこっちに掛かってるからこうでああで、これはグラフで解いたほうがいいな。あー、こっちは二項定理が使えるそうだな。」

「うむうむ、相変わらずの絶好調な勉強っぷりである。これは短い時間を毎日勉強してたら勝手に身についたんだが、短時間で何をどれだけ出来るのかがだいたい分かってきた。まあ要は重要な問題とそうでない問題が分かって短時間の勉強で一番効率良く頭が良くなる道順が分かるのである。昔は沢山勉強する時間はあったのだが変に余裕が出来てしまい結局は部屋の掃除で終わつたみたいな事もザラにあつて成績も悪かった。」

田口「まあ、これが本当のスピードラーニング、ってやつかな!」

誰も聞いてない中、少しドヤ顔を決めてからまた勉強に戻る。勉強とは孤独なのである

A君「おーい田口、遊ぼうぜ!」

これは俺の友達のA君。まあ、前章でも書いたとおりピンからキリまでの生徒がやってくると説明したが、キリのキリである。運動神経だけは凄くない。ラグビー部所属

田口「お前今俺が何してるか分かってる?そう簡単には動かねえよ」

A君「階段ズリ下ろしゲームっての考えたんだが」

田口「この問題はこうでああで……階段ズリ下ろし?……階段ズリ下ろし……ぶつww……」

深くも吹いてしまった俺を見てニヤリと笑うA君。いかんいかん、このままペースに流されたら俺の負けだ(どんな勝負だw)

田口「あー、それじゃあルールだけでも聞いてやるよ。タイトルだけ聞いたら気持ち悪くつてありやしねえよ」

A君「いや簡単なもんだよ。じゃんけんに負けた奴が階段の上から足引つ張られてケツからすべるゲームだ！」

B君「えええ、そんなことしたら危ないよう・・だめだつてえ」

この何とも自身の無さそうなのが俺の友達のB君。背が高くてとにかく色々とデカイ。そして大人くて優しい。手先が器用で美術部所属

「君、もつきゆもつきゆ……危ないなもつきゆもつきゆ……」

何か噛み応えのあるものを食ってるのが俺の友達のこ君。

あだ名がブー。よって特徴は言わなくても分かるだろう。あと黒い水泳部で陸上の五倍ぐらいのスピードで泳ぐ。ついでにこの四人は小学校低学年からずっと遊んでいる

田口「あのなあ、俺らも二年になったわけで、一年の見本になるようになってたりするのが当たり前だろ。まあ、つーわけで参加してやるよ」

B君「前半の話の流れでなぜに参加・・・」

A君「いえーい！ところで条件って何？」

田口「そんなもん前の階段でやったところでつまらねえだろ。見本になるように一年のところの階段でやろうぜ!」

A君「YABEEEEEE!!!」

「君「もつきゅもつきゅもつきゅ!!」（なんか嬉しそう）」

D子「あんたら何やってんの？」

少し説教がすぎそうな感じが俺の友達のD子。幼馴染で幼稚園から遊んでる。昔から一緒に馬鹿やって遊んでいたが（積極性No.1だった）別々の小学校になり中学でまた一緒になって大人になってた模様。なんつーか、結構美人になってて最初はとまどった。俺らの唯一の常識人であり一般常識も凄くあるので助かる。多分D子がいなかったら誰も携帯すら持つてない事態になっていただろう。そして相手のお母ちゃんに「すいません 君いますか？」というやりとりを未だに繰り返してただろ（最近の子供は分からだろ うなあ）。交友も幅広く皆からの信望も厚いが基本俺たちと一緒に

いる事が多い

田口「今から階段ズリ下ろしゲームをやるんだが、今んとこ4人の参戦が決定しててA君がズリおろされる役で後の三人がズリおろす役まで決まってるんだが」

A君「おい何で俺がズリ降ろされ役で決まってるんだよ！ジャンケンだつーたる」

田口「（無視）ってなわけでお前も参戦しない？」

うーんと言いながら何やら考えてらっしゃる様子。その雰囲気たるやなんと綺麗で優美で様になってる事か。世界中誰が見てもズリ下ろしゲームみたいな下らん事を考えてるとは思わないだろうD子「そうねえ、なら私はたまたま横を通った振りをしてズリ下ろされた人を心のそこから蔑んだ目で見る役をやるわ」

田口「イイネ。それじゃあ五人も揃った所ですし行きますか！」

全員「オーー！」

なんというか、超がつくほど個性派ぞろいだが共通して言えるのはみんな本当に元気はいい

B君「おー……って俺も参戦してるの！」

全員「気づくの遅えよ」

ちなみにこの後すぐに体育教師に見つかり、みんなですぐに外に逃げたんだがB君だけ捕まって説教をされましたとさ

午前8時20分 学校

窓からB君が説教されてるのを横目に再び勉強を開始する俺。前でも述べたとうり勉強は日々の積み重ねにある。よく幼稚園にも行っていない子に塾に行かせる人も最近は増えているが、その目的は色々な知識を与える事も確かにあるんだが、もっと大事な事は勉強に対する耐性をつけることだと聞く。人間の集中力なんて一時間以上持たない事は証明されてるので長い時間を勉強するには集中力の無

い状況でも勉強できる耐性が必要なのだ。よって本当に賢い人は毎日何時間も何十時間も、そしてしっかりと濃度の濃い勉強を出来る人がいわゆるトップのトップなのだろう。僕ら大半にそんな耐性は無いので余計に日々のコツコツした勉強が必要になってくる

キンコーンカーンコーン

登校時間のチャイムが鳴りせつせと生徒が入ってくる。ああ、また平和な時間に戻ってきたんだなあと再確認する俺。周りの笑い声も聞こえる。なぜかこのクラスはイジメというイジメも無くみんな楽しそうにしている。

もちろん俺も楽しい（本当にそうか？）。

笑う笑う俺は笑う（希望あるものには希望）。

タノタノシタノシ俺は楽しむ（絶望あるものには絶望）。

ユユユガムユガム俺の笑顔がユガム（何かが違うと分かりながらも）。

クルウクルウドこまデモクルウ（誰にも見せられず）。

オモふオモふココロカラオモふ（誰にもいえず）。

クルクルクルクル（世界は回る）。

『ハヤクホウカイシナイカナァ』トネンズル（下から上へと）。

（恐怖は上がる）

そして先生が来ていつも通りの授業が始まった

第2章 田口君の日常その1（後書き）

今回は短く終わってしまってますいません。まあ、日常と非日常は強く別けたいと思っているのでたまには短くていいですよ（言い訳にならないかな（汗））。色々なご意見感想ご怒りご叱り誤字脱字、絶賛承り中なのでどうかよろしくお願いします

でわであゝ次の更新でまたあいましょう！（可愛い絵文字使いたいけど使い方がわからないや！）

第3章 田口君の日常その3（前書き）

こないだまで寒かったのに最近は暑いですね。間違えて分厚い服着てる人がかわいそう。余計なお世話か。今回は少ししか無いですが、まあ、ちゃっっちゃつと読んでいただければ幸いです。区切りが悪いのはいつものことなのであしからず。すいません・・

第3章 田口君の日常その3

午後3時45分 学校

キーンコーンカーンコーン

一通りの授業が終わった。今日はなかなか難しい授業な上に全部勉強科目なので正直しんどかった。体育とか美術とかあんまり好きじゃ無いが、あつたら幾分かの気晴らしになるよなあ。それとあの問題はやっぱり二項定理で合ってたのである(第二章の最初のほうで言ってたやつ)。

午後3時52分 校庭

「それじゃあな田口!」

「おう、またな!」

A君B君C君(D子は既に他の女友達と喫茶店へ)にそれぞれに笑顔で別れを告げた。先ほども言ったが、ほとんどが都会からのアクセスで来てるため、だいたい皆同じ道で帰る。その逆の道を行くものは本当に少ない。キックのジムに行くために人気ない道を行く俺

午後3時58分 ジムへ向かう道

「さてと、今日も始まるんだな」

ふーっと一呼吸置いてから独り言をボソリと言う俺。徐々にエンジンが入ってきている感じがする。体が暑く熱い。目が充血してるのは気のせいかな。目薬でもさしておこう

午後4時04分 同上

「・・・あ・・・ああ・・・今日も凶も狂も狂歌あ。。」

呼吸が徐々に乱れる才・・・俺・レ。先ほどの笑顔は完全に消えて

いる。もう別人格と言ってもいいかも知れない。何かに取付かれた様にフラフラと体が浮いたような感覚だ。

午後4時12分 同上

「ああ、今日も殺しが始まるんだなあ。ああ。。あああああ。。。。ふふつ。。」

再び笑うオレ。その笑顔は学校の時とは完全に違うものだった。

最近のジムは女性でも利用可能な明るいジムが多い。衛生面もきっちりしてて今や綺麗な所がほとんどだが俺の行ってるジムはその対極にある。周りは薄暗く不気味な感じでジムはというとそんな中に一つある暗い建物の地下にある。女つ気などほとんどない。リングが一つにサンドバックが10近くで一杯という狭い室内ではあるが無駄なスペースは一切無い。なんというか、本当にただ強くなるための場所という感じがする。ジム生も少ないのだがプロで活躍してる選手も多い

「おお、今日も気合はいつてんな田口！今日は三人ほどスパー相手を連れてきたぞ存分に遊んでやれ！」

この髭面のちよつと小太りで元気なオッサンはジムの会長だ。なんつーか、豪快なオッサンって感じ。昔なら鎧被って姫様あーーとか言つてそうだな。つーか想像だが似合うな。ぷぷつw

「ぷぷつw」

「ん？何がおかしいのか知らないが気を抜くなよ田口。一応みんなランカーなんだからな。」

豪快そうに見えて意外と細かい所にまで目が行き届いてる。こいつ目当てに来てるジム生もいるぐらいだ

「うるせえぞボケが。お前に言われなくても敵前で呆けたりはしねえよ。つかスパーの相手は良いんだが一個だけ問題がある」

「・・・ん？何だ言つて見る」

何千人と見てきた会長の声が震える。荒くれものには慣れた会長

だが、それが余計にオレが異質だと感じさせられるのかもしれない
「お前分かってて聞いてんのか？ 後ろにいる女はなんだ？」

オレの機嫌にジム内が一気に凍りつく。ただええ人が入りにくい場所が

「女を殺して良いか？ それともお前が死ぬか？」

息のしにくい場所にまで変わっていた

同日午前10時30分 青波出版社

？「ああー、はいはいそこは直してねー。強調する所はもつとしなさい。見だしなんてそれだけで売り上げに直で影響しちゃうんだから」

ええー、突然ですが私青波出版社に勤めております佐藤幸28才でーすキラリーン！。んーと、今はちよつと忙しいから詳しく事はまた後で説明するねー。ええー、待てないって？ そそもお前に興味ないだつて？ いやいやそんなこと言わずに今すぐ話しますからちよいと聞いてくださいなあ。157の81・64・84（若干の誇張あり）のナイスバディーの自他共に認めるナイスボディーであります。いわゆるこの青波出版社のヒロイン的存在なのであります。ウフフ／／／

幸「うふふ／／／」

社員A「おおー！ 何か知らないけど幸様スマイルきたああああ！ 若干の不気味さを差し引いてもかわいいぞ！」

社員B「年齢にも関わらずサツチんは可愛いなあ。年齢が残念ではあるけど。本当に年齢にあつた可愛さではないけど可愛い！」

社員C「馬鹿やろうお前分かってないなあ。あの年齢にもかかわらず可愛らしくウフフ／／／とか言いながら笑っちゃう痛さがまた良

いんだよ。痛可愛いブームの先駆けでおられる方だぞ！」

私の笑顔でわーわー騒ぎ出す社員ども。うふふ、泣いてなんかないんだからね！

第3章 田口君の日常その3（後書き）

戦いをメインにしときながらなかなか戦いに行かなくて申し訳ないです。まだおおまかな戦闘描写しか決めてませんが、あんまり血が出たりグロイのは避けたいと思っています。それでは次回更新でまたお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8002x/>

神の神による世界ノタメノ秩序変換 絶望には大いなる希望を、希望には深淵

2011年11月4日16時21分発行